多摩×映画 TAMA CINEMA FORUM 会報 #2

たまシネマ通信

2009 SEP

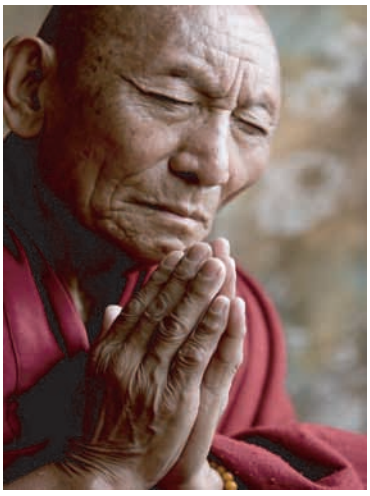
特集 食危機（ショック）

～食べ物映画が増える理由～

日本一新！

Contents

・「雪の下の炎」上映会開催！！
・「大丈夫であるように」沖縄レポート
・映画祭準備中！！
・シネマ隊募集！！



●『雪の下の炎』とは

映画『雪の下の炎』はチベット僧パルデン・ギャツォ氏の33年間にわたる投獄体験を通して、チベットの人々が置かれている状況を知らしめると同時に、人間が持つ精神のはかり知れない強靭さを描き出しています。

　この作品を監督した楽　真琴（ささ・まこと）監督は、パルデン氏についてこう語っています。「彼にはハリウッド映画に登場するヒーローのような華やかさはありませんが、人間ひとりひとりが持つ精神のはかり知れない可能性を私たちに見せてくれます。だからこそ、パルデンのライフストーリーは国境や宗教を越え、苦悩と挫折を体験した全ての命に、雄弁に語りかけることが出来ると思うのです。」

　文化、宗教、言語を奪われつつあるチベットと人生の実り多い時期を投獄と拷問の中で生きたパルデン氏。現在も静かに闘い続けるチベット僧を被写体に収めることで、多くの人々に国際的な問題に目を向けさせる真摯なドキュメンタリー映画です。

●『雪の下の炎』の背景（映画の背景について簡略化して解説します。）

Q1.チベットってどこにあるの？

　場所はインド、ヒマラヤ山脈の北側に広がる中国の西部、チベット高原です。そこにチベット人は住んでいます。現在正式には、チベットという国はありません。1950年に中国から武力侵攻を受けました。現在は「チベット自治区」として中国の一部になっています。

Q2.チベットの人はどんな信仰を持っているの？

　チベットでは独自の仏教が信仰されています。「チベット仏教」と呼ばれ、インドから伝わったものです。ちなみに「ラマ」とは「えらいお坊さん（高僧）」を意味します。

Q3.ダライ・ラマって誰？

　チベット政府の指導者です。チベット仏教において「ダライ・ラマ」とは、歴代受け継がれていく称号のようなものです。　「ダライ・ラマ」という存在は観世音菩薩の化身として信じられ、チベットの人々の信仰の象徴なのです。現在生きているダライ・ラマは14代目です。
かつてはチベット独立を求めて活動していましたが、現在は「中国の一部としての自由なチベット」を求めて活動しています。

Q4.チベットと中国の関係はどんな関係なの？

　中国がチベットを支配しているのが実状です。中国は、チベット文化を抑圧し、宗教までをも制限しました。そして共産主義化・近代化を進めています。1959年ダライ・ラマ14世はインドに亡命し、亡命政府を樹立。中国に対抗しています。チベット内部でも親中国派と反中国（ダライ・ラマ亡命政府）派に別れています。北京五輪の際、一部のチベット僧侶が暴動を起こし、中国当局に逮捕され、世界から注目されたことは記憶に新しい事件です。

参考文献：『そうだったのか！中国』第6章「チベットを侵略した」、池上彰、2007年。

●楽　真琴（ささ・まこと）監督プロフィール

　東京生まれ。幼い頃の記憶にテレビで見たチベットの美しさが残っている。

　大学卒業後、建築を目指しNYに留学するが、慣れない外国の生活に孤独を深める。そんな折、パルデン氏の自伝「雪の下の炎」を読んで励まされる。

　その後、建築から映画制作に方向転換。アシスタントエディタとして数本の長短篇の映画に携わった後、ダライラマ法王の『カーラチャクラ』等数本の短編ドキュメンタリー映画を製作。それが契機となり、幼少の頃から惹かれ続けていたチベット、そしてパルデン氏のドキュメンタリー映画の製作を決意する。

　長編デビュー作となる『雪の下の炎』はチベット、インド、イタリア、アメリカで撮影し、一年間の編集を経て公開された。楽監督は、この映画で「何者にも侵されない強靭な精神の美しさというものを撮りたかった。」と語っている。

今秋11月21日～29日
多摩市で19回目の映画祭を開催します！！
映画祭「TAMA CINEMA FORUM」

☆TAMA CINEMA FORUM特徴☆

日本最大級の市民映画祭！
上映作品は70本以上！ジャンルは様々！
2～3作品を1000円程度の割安価格で鑑賞可能！※
長編コンペティションで新人発掘！

今年の目玉！！

TAMA映画賞を創設！！

多摩市発！！

有名ゲスト？！

☆最優秀作品賞
　本年度最も活力溢れる作品の監督・主演のチームに対し表彰
☆最優秀新進監督賞
　本年度最も飛躍した監督、もしくは顕著な活躍をした新人監督を表彰
☆最優秀新進男優賞
　本年度最も飛躍した男優、もしくは顕著な活躍をした新人男優を表彰
☆最優秀新進女優賞
　本年度最も飛躍した女優、もしくは顕著な活躍をした新人女優を表彰
☆特別賞
　映画ファンを魅了した事象に対し表彰

活力溢れる作品・監督・俳優をいち早く紹介！
あの有名ゲストが多摩に来場か？！

詳しくは・・・

多摩　映画　　検索

で検索→http://www.tamaeiga.org/

※価格はプログラムによって変わることがあります。詳しくはプログラムをご覧下さい。

４月の上映会を終えて・・・メッセージは沖縄へ！

「大丈夫であるように―Cocco 終らない旅―」上映会のその後― 沖縄・辺野古に届いた想い、Coccoのいま

山口渉（実行委員）

前回より・・・

2009年4月18日に映画『大丈夫であるように～Cocco 終わらない旅～』上映会を行いました。
当日、上映会に集まった観客の皆様から、沖縄の美しい海を守るため、メッセージを集めました。
企画担当者である山口が、沖縄・辺野古に自ら赴き、メッセージを届けに行きました。

9月11日、帰宅途中の僕の携帯電話に一通のメールが入った。

「見てる？　今MステにCoccoが出てます。元気に歌ってますよ」。

ずっと彼女のことを気にしているつもりだった。是枝裕和監督の「大丈夫であるように」の最後、ステージを降りたあとの彼女の様子に動揺を感じ、直後に目にする「Coccoは拒食症で入院」の文字。
　その瞬間、彼女がステージから盛んに語りかけていた「生きろ！」が、僕のなかで明確に逆回転し始めたような、とてもとても強い印象が残ったから。

今月、偶然手にした雑誌「パピルス」（Vol.26・09年10月）はCoccoのインタビューを掲載していた。それを通して彼女が拒食や自傷と向き合うなかで、また歌い出すまでの思考の変化を読み取った気がしていたが、音楽番組で歌われた新曲「絹ずれ」を聴いてみると、彼女自身が世の中に対して抱いている罪悪感と理想のギャップにたいして、角度を変えて向き合い始めたことが伝わってきた。映っていたのは、歌うことで生きていくことの責任を果たそうとしていた「大丈夫であるように」の頃のCoccoとはまるで違う姿だ。

おそらく、僕が想像できないくらいに、Coccoはこれまでの活動の意味を振り返り、悩み、それでも生きるということについて考え続けてきたのだと思う。「歌でなにができたのか」と。そんななかでも毎日のように生まれてくる歌たち。歌でなにかを変えたいというのではなく、生まれてくる歌がCoccoにいまの自分の位置を確認させているのだとしたら、それは、彼女の深い迷いの反映のようにも思える。ともかく、その迷いのなかで生まれた新しい歌が、僕たちの前に提示され始めたということだろうか……。

そんなことを考えていると、4月にTAMA映画フォーラム実行委員会で「大丈夫であるように」の特別上映会を主催した際にコメントや映画の感想を募って、200人ほどの多くの方が応じてくださったことの意味を振り返らざるを得ない。この「想い事。」企画の実現に向け僕が動いたのは、映画のなかで語り歌うCoccoに背中を押されたからだった。また、映画を観たそれぞれが静かに感想などを持ち帰るのではなく、自分の手で想いを言葉に託してつなげることで、より強く刻みつけて帰ってほしい、という願いもあった。沖縄まで僕自身が届けに行くことを約束し、実施にこぎつけた企画だった。

「想い事。」企画がどういう結果をもたらしたのか、考えても考えても答えは出てこない。こちらが用意したテーブルでは足りず、順番待ちして短冊に言葉を書き連ねてくれた多くの人たちそれぞれがその瞬間に抱き、書き記した想い･言葉はどこまで定着し、持続しているのだろう？　残念ながら僕がそれを確認する術はない。本当に意義はあったのか?と問い始めたら迷宮入りしてしまう。

それでも約束を果たすために僕は沖縄に行った。6月20日、辺野古で座り込みされている方々は、「遠くからありがとう」と温かく迎えてくれ、一緒に鉄条網にメッセージの記された短冊をくくりつけた。そして、熱心に辺野古の浜辺から見える大浦湾の美しい海について教えてくれた。カラフルなたくさんの短冊は「大丈夫であるように」の上映会で集まったメッセージだと話すと、「Coccoさんは『なにもできていない』ってよく言っていたけど、歌や映画を通じて、たくさんのひとに沖縄の美しい海のことを発信してくれた。だから『そんなことないよ』って言ってあげたい」と応えてくれた。「信じる」というのは押し付けかもしれない。が、僕も映画のチカラ、Coccoの歌のチカラを信じたいと思った。

日々の慌しさのなかで忘れてしまいがちな小さな発見を、僕は「大丈夫であるように」に見出した。この映画をきっかけに初めてCoccoに出会い、彼女の歌を聴き、文章を読んだ。そして、実際に沖縄まで感想やコメントを届けに行き、詳しい話を聴くことで現実を体感した。通常の上映会企画担当という枠を飛び越えた、すばらしい経験になったことは言うまでもない。素直に自分がやっておきたいことを考えて行動した結果だが、少し熱くなっていたかも、とは振り返っている。

　Coccoが再び歌い始めた。彼女のこれからの歌を聴きながら、Coccoがこれまで蒔いてきた種、短冊に言葉を連ねた方々が自分自身のなかに蒔いた種がしっかり根付き、少しずつでも響き合いながら育つことを願い続けなければと思う。

(c)2008「大丈夫であるように」製作委員会

食危機ショック

食べ物映画が増える理由

2009年は「食」映画の当たり年だ。「食」に関する映画作品がどんどん公開されています。
例えば、食の安全を考えさせるドキュメンタリー映画『キング･コーン』、食の安全とオーガニック野菜の普及例を追ったフランスのドキュメンタリー映画『未来の食卓』、誰もが共有できる“食べる”ということを通して“人”のつながりを描くドキュメンタリー映画『eatrip』、ロールキャベツが印象的だった『ホノカアボーイ』、南極での美味しそうな料理の数々に、お腹が空く『南極料理人』など目白押しです。（表１）
　我々人間にとって、なくてはならない「食べる」という行為。とても身近な問題ですよね。なぜ「食」映画が一つのトレンドになったのか？このような流れがが生まれた理由を探ってみます。

　まず、時代背景として重要なポイントは３つ、すなわち「日本の食料自給率の低下」、「食品安全問題」、それらに対するアンチテーゼである「食育・オーガニック」です。これらが後の「食」映画ブームにつながってくるのです。

『ホノカアボーイ』のロールキャベツのレシピは話題になった。

●日本における食の「台所事情」

　食料自給率とは簡単に言えば、「国民が口にするものにおいて、国内で生産されている割合」を示します。日本では1950年代から、現在にいたるまで食料自給率は下がり続けてきました。その下落率は約50%で、自給率およそ80%から40%まで落ち込んできています。日本の自給率は先進国中、最低水準です。
　低下の理由は様々ですが、主に「日本食習慣の洋食化」と「農業集約の失敗による日本の農業における国際競争力の低下」があげることができます。

そして、ＢＲＩＣＳなど途上国の急速な発展によって、地球規模での水・食料不足が問題視されている中、食料自給率の低下は日本の危機管理問題に影響する大きな問題とされています。
　例えば、日本の食卓に欠かせない大豆の自給率は5%（2005年）であったり、牛肉は4.3%という状態です。（表２）
　平時は、自給できない分は海外からの輸入に頼っているので問題はありません。しかし問題なのは、世界的な食糧危機や汚染問題が起きた場合、味噌汁や牛肉が食べれないあるいは価格が高騰する可能性が出てくることです。

●食品安全の疑問と「食」映画のヒット

　それが実際に起きたのが2001年のＢＳＥ牛肉問題や、鳥肉インフルエンザ問題です。これら事件に伴い2007年にはミートホープ社の食肉偽装事件など「食品安全問題」が世間の注目を集めます。そんな中で、2005年に映画『スーパーサイズ・ミー』、2007年に映画『いのちの食べかた』が公開されました。
（表1）この２作品はマスコミで取り上げられ、ロングランを記録しました。

　この２作品は、人々が潜在的に持っていた食べ物に対する疑問、つまり「大量の食べ物はどこから来て、どうやって作られているのか」そしてその「食べ物は安全なのか」という疑問に対して、一つの答えを示したのです。このヒットした２作品は、その後続く「食」映画の火付け役となったのです。

　映画と連動して、食の問題に対して、解決あるいは、対抗した動きが「食育」「地産地消」「オーガニック」「フードマイレージ」などのムーヴメントや言葉となって現れます。
　そしてまた、それらのムーヴメントや言葉をキーワードにした映画が世に出始めます。それが2009年の食べ物映画ブームにつながりました。

表1

近年公開された食べ物がキーワードの映画

（2005年）
・１ヶ月間マクドナルドを食べ続ける『スーパーサイズ・ミー』
（2006年）
・ファーストフード業界の内幕を暴く映画
『ファーストフードネイション』
（2007年）
・世界中の食糧生産の現場を撮影した『いのちの食べかた』
（2008年）
・ブタを飼って、大きくなったらみんなで食べよう！
『ブタがいた教室』
（2009年）
・“ダイエット”がテーマの『THEダイエット!』
・食が軸ではないが、食物連鎖の重要性を暗に示す『里山』
・世界一を目指す若手料理人を追った
『ファイティング･シェフ 美食オリンピックへの道』(秋公開予定)
・のり弁で人生再起を図る『のんちゃんのり弁』(9月26日公開)

表2・

●食べ物映画が増える理由

（※映画の内容について触れています。）

今年は、食べ物映画ではひとつの分岐点となっています。つまり、「美味しそう」「エンターテインメント」な食べ物映画と、「真面目」で「食の現状」を映す食べ物映画という主に２方向に枝分かれをはじめているのです。（表３）

これにより、様々な客層を食べ物映画に呼び込むことが可能となり、食べ物映画が一つのビジネスチャンスとなっているのではないかと考えられます。

もうひとつの理由として、環境・エコブームと相乗効果を発揮していることがあげられます。

映画『未来の食卓』では、農業先進国フランスにおける農薬による土壌汚染から被害、そしてそこからのオーガニック（自然栽培）転換する模様が写されています。

また、映画『キングコーン』では、アメリカがトウモロコシの輸出大国として映されています。
そのトウモロコシは国産牛肉の飼料となっています。
そして、飼料用トウモロコシ輸出にかかるCo2、生産にかかるCo2などを含めたCo2も食べ物に計算するべきだという「フードマイレージ」もエコロジーな考え方なのです。

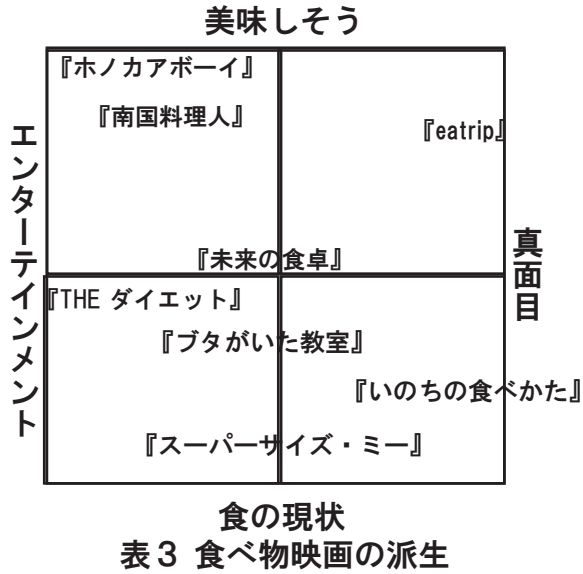


表３ 食べ物映画の派生

このように、食べ物映画は、「日本の食料自給率の低下」と「食品安全問題」、そこから発展した「環境・エコ・食育・オーガニック」のブームに乗って増えたと考えられます。

●農家が自分の作った作物を食べない現実

食べ物映画が流行っている理由は、理解していただけましたか？
さて、「食品安全」が疑問されている昨今、ある印象的なシーンを紹介します。
ドキュメンタリー映画『キングコーン』『未来の食卓』において農家のインタビューされていました。
なんとその農家は自分の作った作物を食べないというのです。

いや、正確には食べられないのです。
何故なら、農薬で汚染されている、あるいは食用ではない不味いトウモロコシのためなのです。

トウモロコシ農家のおじいさんは言う。
「俺たちが作ってるのは食べ物じゃない。クズを作ってるんだよ。」
そのクズのおかげで、ハンバーガーが100円になったり、甘いドリンクが飲めるわけだが・・・
そのトウモロコシを食べる牛は太り、アメリカ人も太っています。（アメリカ人の肥満割合は66%）
あなたはどう思いますか。まずは食べ物映画を観てみましょう。

映画祭ボランティアスタッフ募集！

「第１９回映画祭TAMA　CINEMA　FORUM」の運営スタッフ（たまシネマ隊）を募集します！

「１年間を通じて参加するのは難しいけど、
映画祭の期間だけでも、スタッフとして参加したい」
そんな方はぜひ「たまシネマ隊」に参加してみてください。
学生歓迎！未経験者、歓迎いたします。
（※映画祭期間内の参加日数が3日以上可能な方のみになります）

つきましては、下記の日程で説明会を行います。
ご興味ある方は、ホームページより申し込み頂くか、事務局へお問合せください。

「たまシネマ隊」説明会

■日時：10月4日（日）・18日（日）
いずれも14時から（受付は13時半から）
■場所：ベルブ永山3階講座室

ホームページもしくは、電話・FAXで
「参加日・氏名・住所・連絡先・性別・年齢」
を書き添えてお申し込みください。
右のQRコードからもお申し込みいただけます。

■問合先
tel 080-5450-7204

fax 042-337-6003

http://www.tamaeiga.org/

TAMA映画フォーラム実行委員会
〒206-0025多摩市永山1-5（ベルブ永山内）多摩市立永山公民館内
TEL：080-5450-7204（直通）、042-337-6661(代)
FAX：042-337-6003
http://www.tamaeiga.org/